The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鈴木先生のもとで学んだ13年間を振り返って
Author(s)	青山, 瑞季
Citation	ハンガリー研究. 2025, 3, p. 3-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100412
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鈴木先生のもとで学んだ13年間を振り返って

青山瑞季

1.　はじめに

私は 2011 年 4 月に大阪大学外国語学部ハンガリー語専攻に入学し、大学院博士後期課程に在籍中の現在まで 13 年間、鈴木先生のもとで歴史学を学んだ。この 13 年間を振り返りながら、鈴木先生から学んだことや先生との思い出を述べ、先生への感謝の意を表したい。

2.　学部生時代

鈴木先生との出会いは、私が学部 1 年生の後期に受けた先生の講義である。この講義ではハンガリーの歴史、経済、社会状況などについて学ぶことができた。私は高校時代に世界史の授業を通して東欧の歴史に関心を持っていたが、講義を通して歴史への興味がさらに強くなった。講義では授業の最後に、コメントシートに授業内容に関する質問を書くことができ、毎回欠かさず積極的に質問をした。まだ知識の全くない 1 年生による質問の中には、答えにくいものもあったはずだが、鈴木先生はどんな質問にも真摯に答えてくださった。このような鈴木先生の対応のおかげで、私のハンガリー史に対する興味は一層強くなった。

2 年生のときには、羽場久美子（編著）（2008）『ハンガリーを知るための 47 章』（明石書店）を用いた授業が行われた。各々が興味のある章を選び、その章の内容を発表するという授業形式であった。当時ハンガリー史の中でもとりわけ社会主義時代に関心を持っていた私は、第 13 章「カーダールの功績」を選んで発表した。この授業を通して初めて、分かりやすいレジュメの作り方についても学ぶことができた。最後の授業のあとに、私は鈴木先生に大学院進学を検討していると打ち明けた。まだ 2 年生であったことから、当時の鈴木先生は慎重な態度をとっていたが、「まずはハンガリー史についてしっかり勉強をしてください」と仰っ

たことを覚えている。以来私は興味のある時代、出来事に関する研究書を読み漁り、ハンガリー史への理解を深めていった。

こうしてハンガリー史を深く学んでいく中で、具体的にやりたい研究テーマを見出すことができた。それは、1918 年の「十月革命／ヒナギク革命（以下「十月革命」とする）」と呼ばれる革命についてであり、先行研究が少ないことに気が付き、このテーマに取り組みたいと思うようになった。そこで 3 年生の留学中には、「十月革命」に関するより専門的な論文を読むことに挑戦した。それまでは日本語で書かれた文献ばかり読んでいたため、ハンガリー語で書かれた専門的な論文を読むのは初めてのことであった。最初のうちは全く歯が立たなかったが、鈴木先生から「読んでいてわからない箇所があればメールで聞いてください」と言っていただいたことから、頻繁に先生にメールで質問をしながら読み進めた。最初のうちは専門用語をどのように調べたらよいかわからず、鈴木先生には多くの質問をして迷惑をおかけしてしまったが、どの質問にも丁寧に答えてくださった。自らの調べ方が甘く、「もっときちんと自分で調べてください」と何度も指摘を受けるうちに、次第に自力で調べる力がついていった。

留学から帰国後、本格的に大学院進学への準備を進めながら、卒業論文を執筆した。大学院では、卒論の内容をより発展させたテーマを研究したいと考えていたため、卒論は進学に向けて非常に重要なステップであると位置づけ、熱心に取り組んだ。特に、鈴木先生の指導を受けながら、ハンガリー語で書かれた様々な研究書や論文を精読し、卒論内で引用した。学部生としてハンガリー語の専門書を数多く読むということは異例だったようであり、執筆後には鈴木先生からも努力を評価していただけたことが非常にうれしかった。学部生のうちから鈴木先生のご指導のもと、ハンガリー語の専門書を読む力を身につけられたことで、大学院進学後の研究もスムーズに進められるようになった。熱心に指導をしてくださった鈴木先生には深く感謝している。

3.　人間科学研究科での大学院生活

私が博士前期課程に進学した当時、鈴木先生の所属先は人間科学研究科であった。そのため、私は同研究科の「比較文明学研究室」に所属し、主に思想史や哲学史を専攻する学生たちとともに学ぶこととなった。歴史学を専攻する者として最低限読むべき概要書を読み進めながら、歴史学に本格的に取り組んだ。外国語学部から他研究科に移ったことで、外国語学部では学ぶことのなかった学問にも触れることができ、知的好奇心が高まるような日々を送ることができた。しかし、新しい環境になじめず、精神的な疲れが出るようになり、研究に没頭できない時期もあった。そのような時期にも鈴木先生は親身になって、時間を割いて悩みなどを聞いてくださった。以後、博士後期課程に進学した現在に至るまで、将来への不安や様々な悩みを抱えるたびに、鈴木先生には何度も助けていただいた。指導教員である鈴木先生が常に自分の味方でいてくださったことは、私が今も研究を続けられている大きな要因である。

修士論文「1918-19 年ハンガリーの土地改革の背景に関する考察―カーロイ・ミハーイによる土地改革の意義を問い直す―」は高い評価を受け、人間科学研究科賞を受賞することができた。鈴木先生の熱心なご指導と精神面でのサポートがなければ、成し遂げられなかったであろう。

4.　博士後期課程での日々

私が博士後期課程に進学する年度に、鈴木先生が言語文化研究科（現：人文学研究科）に異動になったことから、私も箕面キャンパスに戻ることになった。

コロナ禍と重なり研究留学に行く時期が予定より遅れてしまったことや、留学からの帰国後に休学を延長して仕事を始めたことから、研究の進捗は計画よりも遅れることとなった。私は現在、通信制高校と学習塾で講師として働いている。教育系の仕事に就き、高校生・大学生のような若い人たちに教えたいという目標を持っていたことからこの仕事を選択した。研究が遅れるにもかかわらず、鈴木先生は私のどんな決断も必ず尊重して応援してくださった。いわゆるポスドクの人たちが仕事を得ることの難しさも十分に理解してくださり、あらゆる仕事に挑戦しよう

とする私のことを理解してくださっている。研究は、当初の計画より大幅に遅れているが、来年度の博士論文提出を目指し、現在は仕事と両立しながら研究に取り組んでいる。

5.　おわりに

鈴木先生のもとで研究を進める中で、良い研究を行う上でもっとも大切なことは、丁寧に文献を読み込むことであると学んだ。一見当たり前のことのように思われるかもしれないが、私は膨大な文献を読む作業に追われる中で、この基本を疎かにしてしまうことがあった。しかし、鈴木先生と一緒に文献を読むことで、分からない箇所を決して放置せず、細かく調べながら内容を丁寧に理解することが、良い研究成果に結びつくことを実感した。大雑把な性格の私にとって、几帳面な性格の鈴木先生が指導教員であったおかげで、丁寧に研究を進める姿勢を身につけることができたのだと思う。

もう一点､鈴木先生のもとで学びながら気が付いた大切なことがある。それは、どれほど忙しくても、学生のために時間を割き、真摯に向き合う姿勢である。鈴木先生は、私に対しても、研究の相談だけでなく、将来への不安やプライベートでの悩みまで耳を傾け、時間をかけて向き合ってくださった。私にとって鈴木先生は、研究の指導教員であるだけでなく、何でも話せる父親のような存在でもあった。今、私は通信制高校と学習塾で日々生徒と向き合っているが、鈴木先生のように、生徒たちの一番の味方であり、理解者でありたいと思っている。将来的に大学教員など教育系の仕事に就いても、常に鈴木先生のような教員になることを目標にしたい。

また、鈴木先生が一般教養の授業などで、ハンガリーを専門としない人たちに対しても、分かりやすくハンガリーという国について説明されていた姿から、専門外の人に自分の研究を分かりやすく伝える工夫の大切さも学んだ。さらに、研究だけでなく、あらゆる物事について分かりやすく人に伝える工夫も身につけていった。その結果として、通信制高校と学習塾での授業では、生徒から「非常に分かりやすい」と高評価を

受けている。人に物事を分かりやすく説明することの大切さを鈴木先生から学べたことも、私にとって大きな財産の一つである。

最後に、私は今年度で大学院を満期退学する見込みであるが、大阪大学で学んだ 13 年間の中で、鈴木先生との出会いが一番の財産となった。13 年間ご指導いただいた鈴木先生に、心から感謝している。